

第一章 マアレイの亡霊

先ず第一に、マアレイは死んだ。それについては少しも疑いがない。彼の埋葬の登録簿には、僧侶も、書記も、葬儀屋も、また喪主も署名した。スクルージがそれに署名した。そして、スクルージの名は、取引所においては、彼の署名しようとするいかなる物に対しても十分有効であった。

老マアレイは戸の鋌のように死に果てていた。

注意せよ。私は、私自身の知識からして、戸の鋌に関して特に死に果てたような要素を知っていると云うつもりではない。私一個としては、むしろ柩の鋌を取引における最も死に果てた鉄物と見做したのであった。けれども、我々の祖先の智慧は直喩

にある。そして、私のような汚れた手でそれを掻き素すべきではない。そんなことをしたら、この国は滅びて仕舞う。だから諸君も、私が語気を強めて、マアレイは戸の鉞の様に死に果てていたと繰り返すのを許して下さいませう。

スクルージは彼が死んだことを知っていたか。もちろん知っていた。どうしてそれを知らずにいることが出来よう。スクルージと彼とは何年とも分らない長い歳月の間組合人であった。スクルージは彼が唯一の遺言執行人で、唯一の財産管理人で、唯一の財産譲受人で、唯一の残余受遺者で、唯一の友達で、また唯一の会葬者であった。そして、そのスクルージですら、葬儀の当日卓越した商売人であることを失うほど、それほどこの悲しい事件に際して気落ちしてはいなかった。そして、万に一つの間違ひもない取引でその日を荘厳にした。

マアレイの葬儀のことを云ったので、私は出発点に立ち戻る気になった。マアレイが死んでいたことには、毛頭疑いが無い。この事は明瞭に了解して置いて貰わなければならぬ。そうでないと、これから述べようとしている物語から何の不思議なこと

も出て来る訳に行かない。あの芝居の始まる前に、ハムレットの阿父さんは死んだのだということも十分に呑み込んでいなければ、阿父さんが夜毎に、東風に乗じて、自分の城壁の上をふらふらさまよい歩いたのは、誰か他の中年の紳士が文字通りにその弱い子息の心を脅かしてやるために、日が暮れてから微風の吹く所へ——まあ例えばセント・パウル寺院の墓場へでも——やみくもに出掛けるよりも、別段変ったことは一つもない。

スクルージは老マアレイの名前を決して塗り消さなかった。その後幾年もその名は倉庫の戸の上にそのままになっていた。すなわちスクルージ・エンド・マアレイと云うように。この商会はスクルージ・エンド・マアレイで知られて居た。新たにこの商会へ這入って来た人はスクルージのことをスクルージと呼んだり、時にはマアレイと呼んだりした。が、彼は両方の名に返事をした。彼にはどちらでも同じ事であったのだ。

ああ、しかし彼は強欲非道の男であった。このスクルージは！ 絞り取る、振じ取

る、掴む、引つ掻く、かじりつく、食欲な我利々々爺であった！ どんな鋼でもそれからしてとんと豊富な火を打ち出したことのない火燧石のように硬く、鋭くて、秘密を好む、人づき合いの嫌いな、牡蠣のように孤独な男であった。彼の心の中の冷氣は彼の老いたる顔つきを凍らせ、その尖った鼻を痺れさせ、その頬を皸くちやにして、歩きつきをぎこちなくした。また目を血走らせ、薄い唇をどす蒼くした。その上彼の耳触りの悪い嗶れ声にも冷酷にあらわれていた。凍った白霜は頭の上にも、眉毛にも、また針金のような顎にも降りつもっていた。彼は始終自分の低い温度を身に附けて持ち廻っていた。土用中にも彼の事務所を冷くした、聖降誕祭にも一度といえどもそれを打ち解けさせなかつた。

外部の暑さも寒さもスクルージにはほとんど何の影響も与えなかつた。いかな暖気も彼をあたためることは出来ず、いかな寒空も彼を冷えさせることは出来なかつた。どんなに吹く風も彼よりは厳しいものはなく、降る雪も彼ほどその目的に対して一心不乱なものはなく、どんなに土砂降りの雨も彼ほど懇願を受け容れないものはなかつた。